様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：32517
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号： 22520369
研究課題名（和文） 漱石文学における老子の哲学と『文選』の神話についての研究
研究課題名（英文） Research into Soseki's Literature concerning Philosophy of Lao-tsu and Mythology in *Monzhen*

研究代表者
李哲権（LI ZHEQUAN）
聖徳大学・人文学部・准教授
研究者番号：70306455

研究成果の概要（和文）：
研究期間中、おもに「文学と哲学」、「文学と神話」という二つの大きな方向性に沿って、それぞれ「漱石文学と老子の水の哲学」と「漱石文学と『文選』の神話」についての比較対照研究を行なった。その際、漱石文学研究を現在の中国における老子哲学や『文選』神話に関する研究の趨勢を反映したものにするために、中国に赴いて資料収集や現地調査を行なった。研究成果は所期の目的を達成した形で学会や学会誌に発表した。

研究成果の概要（英文）：
All through the research period, I made comparative studies about "Soseki's literature and Lao-tsu's philosophy of water" and "Soseki's literature and mythology in *Monzhen*"; the former is connected with the theme of "Soseki and Philosophy" and the latter with "Literature and Mythology". In conducting the research, I made fieldwork and collected useful materials in China so that these studies about Soseki should follow and reflect recent trends in the investigations of Lao-tsu and the *Monzhen* Mythology in China. The outcome was published in academic conferences and journals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：夏目漱石・老子の哲学・水の女・文学的哲学・哲学的文学・動の原理・静の原理

１．研究開始当初の背景

（1）漱石文学に多大な影響を及ぼしたものに西洋文学がある。この影響関係についてはすでに多くの詳細な研究がなされている。しかし、同じく漱石文学に大きな影響を与えた中国の文学、神話、哲学については、いくつかの散発的な研究、たとえば、比較文明論による「漱石と魯迅」や注釈による「漱石の漢詩」以外は、体系化された本格的な研究はいまだなされていない。本研究は、漱石文学の根源に触れるものとして、漱石文学と老子の哲学、漱石文学と『文選』の神話を取り上げ、詳細な比較対照研究を通して、漱石文学が有する特殊性と独創性を明らかにする。

（2）漱石にとって、文学は二つしかなかった。すなわち、「漢学に所謂文学」と「英語に所謂文学」である。彼はこの二種類の文学を「到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のもの」として認識していた。帰朝後、彼が「英文学に欺かれたる如き不安の念あり」といって、「根本的に文学とは如何なるものぞ」と究極的な問いを発する時、彼は再び東洋への回帰を果たし、明治 25 年、自分が帝国大学在籍中に書いた「老子の哲学」の世界へと戻っていかざるをえなかった。

こうした回帰は、漱石文学と老子の「道」（Tao）の理念を表わす三つのイメージ、谷間（谷神）、女（牝）、水（上善如水）との再会であり、婚姻である。

いうまでもなく、西洋の〈水の女〉のテーマ系に属する〈水の女〉は固定化されたイメージしか持たない類型的なものである。それに対して、中国の〈水の女〉のテーマ系に属する〈水の属性を生きる女〉は「人間の女」である前に、「物質の女」であり、「変化を生きる女」である。

漱石は東西を知る教養人として、この二種類の〈水の女〉を見わたせる高みを有していた。そして、その高みから自分の独創性を編み出している。その独創性とは、一つは、これから描く女を徹底的に〈水の女〉として描くことで、従来の慣習的なやり方――女を「人間の女」として描くことに別れを告げること、つぎに、そうすることで西洋伝来の古典的で排他的な手法――「人間の属性」である心理や精神性を登場人物の身体に注入することを放棄すること、そうして、その代わりに水という物質が有している「動の原理」や「静の原理」を彼女たちの行動を可能にするエネルギーとして配分してやること、であった。

（3）本研究は、以上の偏った研究によって生じた空白を埋めるべく、西洋の〈水の女〉とはまったく性質を異にする中国の〈水の女〉、すなわち「朝は雲になり、夕方には雨になる」〈水の属性を生きる女〉のイメージを導入することで、従来の漱石文学の研究が流布させた「新しい女」や「誘惑する女」、あるいは「恐れない女」といったイメージが如何に歪んだものであったかを指摘すると同時に、漱石文学の有する独創性を明らかにする。

２．研究の目的

（1）漱石文学が書く行為において、一作ごとに新しいアプローチの仕方を見せていたのも、老子の水の哲学に源を置く〈水の属性を生きる女〉をその根底に据えていたからである。

ゆえに、漱石文学は、「私の経験」を語らない文学である。すなわち、非告白の文学である。漱石にとって、小説を書くことは、始源の隠喩を解釈して語ることである。その場合、始源の隠喩は老子の水の哲学であり、『文選』の神話の〈水の女〉である。漱石があまたの作家たちとは違って、全知全能の神の座を自分のために取っておかなかったのはそのためである。なぜなら、漱石文学における登場人物は、「私の経験」、「私の告白」から産まれてくるのではなく、一つの隠喩から流出（Emanatio）してくるからである。

（2）漱石にとって、作家とは創造する主体ではなく、隠喩の子が産声をあげることを可能にする空間であり、場である。隠喩は、この作家という空間、作家という場を仮住まいにする時、西洋の作家が産み出す子（「教養小説」の土壌に生る人間の子）とは異なる子を産み落とすのである。つまり、「経験の子」、「告白の子」ではなく、隠喩の属性を生きる〈水の女〉の種族の一員である〈風の女〉、〈団扇の女〉、〈手帛の女〉、〈雲の女〉、〈岡の女〉、〈峰の女〉、〈鳥の女〉、〈雨の女〉、〈香水の女〉を産み落とすのである。

本研究は、以上のような認識の下に、まず漱石文学が如何なる性質のものであるかを考察する。つぎに、漱石文学に働く想像力が如何なる背景と如何なる性質を有するものであるかを解明する。さらに、漱石文学を支え、可能にする文体的特長とは何かを具体的な作品分析を行なうことで明らかにする。

３．研究の方法

（1）漱石文学は老子の水の哲学と手を結ぶことで、「隠喩の文学」、「置き換えの文学」になっている。漱石文学における女は、そのような隠喩によって置き換えられた存在である。すなわち、水のテーマ系である空、雲、雨、風の有する「動の原理」によって表象される存在である。したがって、そのような女たちによって語られる愛も、人間の愛ではなく、雲や風によって語られる非―人間的な愛である。本研究は、こうした認識の下に、漱石文学が掲げる命題、すなわち「女は恐い」、「女はわからない」、「女は語れない」に内包されている究極的な意味とは何かを究明する。これによって、老子の水の哲学や『文選』の「巫山の女」の神話が漱石文学に及ぼす影響が如何に大きなものであったかが判明する。また、漱石が一日本人として、老子の哲学を如何に理解し、そしてその理解したものを如何に分節化して文学の言語に変えていったのかを、詳細な作品分析を通じて追跡し、明らかにする。

（2）漱石文学が単なる文学ではなく、深遠な哲学的思想を隠し持った「人間研究」であるのは、こうした老子の哲学をその根底に据えているからである。その意味で、漱石文学は哲学が生産する文学（哲学的な文学）であ

ると同時に、文学が生産する哲学（文学的な哲学）でもある。

したがって、本研究が掲げるいくつかのテーマについての比較対照研究が詳細な検討を経て、最終的に具体的な解明と明白な結論に達した場合、漱石文学の研究には新たな地平が現われるに相違ない。それによって、これからの研究は単なる二言語、二国間の比較対照研究ではなく、文学と哲学が頻繁に領域侵犯を行なうことで訪れる新たな融合と混合を目指した研究になる。漱石文学が、境界線上に成る異種混交の「世界文学」になりうるのもそのような性質を有する「開かれたテクスト」であるからである。

４．研究成果

本研究は、当初の研究計画書に掲げた研究課題についてほぼクリアする形で研究を行ない、現在に至っている。

研究期間中、おもに「文学と哲学」、「文学と神話」という二つの大きな方向性に沿って、それぞれ「漱石文学と老子の水の哲学」と「漱石文学と『文選』の神話」の比較対照研究を行なった。漱石文学は単なる日本の文学ではなく、難解な老子の哲学を文学的言語で語り直した「哲学的な文学」であると同時に、『文選』の神話を変換プロセスを経て、文学に置き換えた「神話的な文学」でもある。

漱石文学を「文学が生産する哲学」という視点での議論は、すでに拙論（「漱石的文学と文学的哲学」聖徳大学言語文化研究所編『論叢』13 号　2005 年）で取り上げており、それを土台に老子の哲学的言説が如何なるプロセスを踏んで、漱石の文学的エクリチュールへと置き換えられているのか、ということについての考察もその後発表した拙論（「隠喩から流れ出るエクリチュール　―老子の水の隠喩と漱石の書く行為」『日本研究』第 41 巻）において、ある程度明らかになっている。

にもかかわらず、老子哲学は必ずしも本研究者の専門ではなかったので、初年度はその資料の収集に力を入れた。老子哲学については日本ではすでに多くの研究がなされている。しかし、それは必ずしも現在の中国の研究動向を反映したものではない。これは、西洋語で書かれた研究書の翻訳は盛んになっていても、中国語で書かれた研究書の翻訳は皆無に等しくほとんどなされていない現状と深い関係がある。現在、中国では経済力とナショナリズムを背景に、老子哲学の研究が空前の勢いで盛んになっている。ゆえに、漱石文学研究を現在の研究趨勢と結びついた豊かなものにするためには、どうしても現地調査と資料収集が必要であった。そのために、初年度はおもに中国社会科学院や道教関係の寺院や大学図書館等を訪ねて、資料収集や現地調査を行なった。また、研究成果を広く学会等に発信するために、日本や中国で開催される関連学会で研究発表を行なうほかに、関連学会誌に研究論文を掲載した。

23 年度は、より総合的で体系的な研究を目指すことで、本研究で掲げた三つの研究課題、すなわち、漱石文学は如何なる性質のものであるのか、漱石文学に働く想像力は如何なる背景と如何なる性質を有するものであるのか、漱石文学を支え、可能にする文体的特長は何か、についての全容解明を図った。また、漱石文学を単なる文学ではなく、「哲学が生産する文学」として読む可能性、あるいは「文学が生産する哲学」として読む可能性について、既発表の拙論にさらなる哲学的な考察を加えることで、漱石的想像の世界において文学と哲学の境界が如何に曖昧模糊なものになっているかを主にエクリチュールの角度から言及した。そのほかに、「漱石文学と老子の水の哲学」の比較対照研究で明らかにした水の「動の原理」に対する「静の原理」として、漱石文学における絵画的言説の有するメター次元に研究の幅を広げていった。こうした研究によって、漱石の小説は単なる「絵画小説」（芳賀徹）ではなく、水の「動の原理」に対する画の「静の原理」を有した、極めてシンメトリックな構造を持った論理的なテクストであることが明らかになった。と同時に、漱石的な〈水の女〉が「動の原理」を生きる存在から「静の原理」を生きる存在に移行していく時、そこに漱石的テクストの有する一つの必然性として〈画の女〉がさりげなく挿入される、エクリチュールのメカニズムも明らかになった。

こうした研究の成果を雑誌に掲載するほかに、実際に中国や台湾の学会や教育現場に出向いていって口頭発表を行なった。そうすることで、多くの建設的で刺激的な視点や議論との出会いを果たし、本研究の範囲をもとの「漱石文学と老子の哲学」から、「太宰治文学と老子の哲学」という新しい分野へと広げていくこともできた。

最終年度は、引き続き中国の神話と漱石文学との影響関係を調べるほかに、おもに神話的な記述の文学への置き換えという視点で、日本の神話にも目を配るようにした。その結果、漱石文学における神話の影響は中国の神話だけでなく、日本の神話、たとえば『古事記』の雄略天皇にまつわる〈水の女〉（＝見目麗しい童女と描写される「巫女」）や折口信夫の「境界」という民俗学的な視点から提示する日本的といわれる〈水の女〉（水辺の小屋で一晩中機を織りながら川や海を渡ってくる遠来の客＝異人「マレビト」を待つ女）とも関わるのではないかという新しい展望が開けてきた。周知のように、漱石の『草枕』における「余」と那美の出会う所も「鏡ヶ池」

であり、『三四郎』の三四郎と美禰子が出会う所も池である。つまり、漱石的テクストにおける登場人物たちの遭遇の空間、場は水辺という特権的な空間になっている。漱石的なテクストに神話的な奥行と深さを付与しているのは、実はこのような水辺における遭遇という、神話的な記述様式であったのである。よって、漱石的〈水の女〉は中国、日本、西洋といったさまざまな国や民族の神話や伝説が絡み合ってできた混合体的性質を有したものであるといわなければならない。漱石文学が難解な老子の哲学を文学的言語で語り直した単なる「哲学的な文学」、「神話的な文学」ではないのはそのためである。

こうした新しい展望による新しい認識は、申請当初の古い認識に修正を加えるように促がした。したがって、これからの発展的な研究は、以上のような日本の神話や民俗学の研究成果を取り入れ、反映させた、もっと広い視野に立脚したものになるだろうと予測される。現在、この新しい認識を形にするために、今日までとは方向性の異なった資料の収集や伝記的事実の考察に着手している。そして可能な限り、今年度中または来年度中には論文にまとめて、本研究の延長線上に成った研究成果として世に送り出したいと思う。

上記研究成果についての詳細は、以下の「５．主な発表論文等」に記しておいた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 野網摩利子著　『夏目漱石の時間の創出』
（東京大学出版局　2012 年）『比較文学研究』第五十五巻（東京大学比較文學會編）所収　書評（2013 年）

② 漱石・莱布尼茨・笛卡児――哲学文学与文学的哲学
『日本文学研究』（日本文学研究会延辺大学十二回年会論文集）所収
青島出版社（2012 年）

③ 『虞美人草』論―〈動く女〉を〈画の女〉する物語
『論叢』19 号　聖徳大学総合言語文化研究所編（2011 年）

④ 漱石文学における動くことと恋
聖徳大学人文学部研究紀要 22 号(2011 年)

⑤ 二つの遺書が織りなすテクスト（下）
―井上靖の『猟銃』と夏目漱石の『こころ』における包むもの
『井上靖研究』第 10 号（2011 年）

⑥ 二つの遺書が織りなすテクスト（上）
―井上靖の『猟銃』と夏目漱石の『こころ』における包むもの
『井上靖研究』第９号（2010 年）

⑦ 隠喩から流れ出るエクリチュール――老子の水の隠喩と漱石の書く行為
『日本研究』第 41 巻　国際日本文化研究センター紀要（2010 年）

⑧ 漱石文学における「鳥の女」
聖徳大学人文学部研究紀要 21 号（2010 年）

⑨ 由隠喩産生的作品――老子的水哲学和漱石的写作行為
『東亞詩学与文化互読』（川本皓嗣古稀記念論文集）所収
中華書局（2010 年）

⑩ 夏目漱石新論――作為隠喩的植物
『日本文学研究』（日本文学研究会三十周年記念論文集）所収
訳林出版社（2010 年）

〔学会発表〕（計４件）

① 漱石的エクリチュールとラファエル前派――細密描写と顕微鏡と博物学芸術
中国日本文学会第十三回国際学術大会（中国日本文学会）
中国蘭州大学（中国）
（2012 年 8 月 20 日）

② 文学と絵画――漱石の『夢十夜』の「第一夜」を読む（招待講演）
輔仁大学（台湾）
（2012 年 3 月 7 日）

③ 文学と哲学の間――老子哲学と漱石・太宰治
中日韓言語・文化研究国際共同シンポジウム 2011
西安師範大学（中国）
（2011 年 8 月 20 日）

④ 漱石と井上靖の文学における包むものと包まれるもの――二つの遺書を中心に
中国日本文学会第十二回国際学術大会（中国日本文学会）
延辺大学（中国）
（2010 年 8 月 20 日）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
李哲権（LI ZHEQUAN）
聖徳大学・人文学部・准教授
研究者番号：70306455

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし